

古典の享受・継承に関する学習

－ 現行中学校教科書を中心に －

有馬義貴

(奈良教育大学 国語教育講座 (国文学))

Learning about the Reception and the Succession of Classical Literature

Focusing on Junior High School Textbooks

Yoshitaka ARIMA

(Department of Japanese Language Education, Nara University of Education)

要旨：古典の学習においては、作品の内容理解ばかりではなく、その作品が古くから享受され継承されてきたものであるということへの理解もまた重要であろう。実際、現行の中学校教科書には、古典の享受・継承への着目を明確に促している教材や、享受・継承に関する学習に資すると思われる資料が少なからずみられる。それらの有効活用が求められよう。例えば、『竹取物語』について、教科書にみられる挿絵や写本・版本の写真等への着目を契機に、江戸時代における川柳など、後代の文化とも結びついた発展的な享受・継承のありようをおさえ、その上で映画や漫画、現代語訳等をみれば、現代においても引き続きそれがなされていることが理解されてくる。学習指導要領などのいう「言語文化を継承・発展させる態度」の育成のためには、そのように、現代に生きる自分たちも古典の「継承・発展」にかかわりうるのだということを実感できるような学習が必要なのではないか。

キーワード：古典文学 classical literature

享受・受容 reception

継承 succession

発展 development

教科書 textbook

1. はじめに

『中学校学習指導要領解説 国語編』（平成 20 年 7 月）では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」について、次のような説明がなされている。

……我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた伝統的な言語文化に親しみ、継承・発展させる態度を育てることや、国語の果たす役割や特質についてまとめた知識を身に付けさせ、言語感覚を豊かにし、実際の言語活動において有機的に働くような能力を育てることに重点を置いて構成している。

また、「中央教育審議会答申」（平成 28 年 12 月 21 日）においても、

現行の学習指導要領では、国語科においても我が国や郷土が育んできた伝統文化に関する教育を充実したところであるが、引き続き、我が国の言語文化に親しみ、愛情を持って享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて

育成するため、伝統文化に関する学習を重視することが必要である。

とあるように、「言語文化を継承・発展させる態度」の育成は引き続き重視されており、新しい学習指導要領及び解説もその方針を踏まえたものとなっている¹⁾。

「中央教育審議会答申」には「その担い手として」という文言もみられるが、それでは、古典文学などの「言語文化」について、自分たちがその「継承・発展」を「担」う存在であるといった意識を学習者に芽生えさせるためには、どのような学習が効果的なのだろうか。作品を読み、その魅力に触れて価値を実感する、といったことも、一つの方法として勿論ありうるのだろう。実際、古典に関する教育・学習は、そのように、今に伝わり残っている作品を読むということに重きが置かれてきた傾向があるように思われる。しかし、「言語文化に親しみ、愛情を持って享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度」の育成のためには、作品の内容に触れるということばかりではなく、その作品が実際に古くから人々に「享受」され、「継承」され、「発展」させられてきたものなのだ、ということを実感できるような学習もまた必要なのではないだろうか。

2. 過去の提言とのかかわりから

上述のような提言は、これまでも既になされているものである。例えば、片桐洋一氏は、『伊勢物語』の享受に関する講演の中で、次のように述べられている。

学校教育の場に「古典の時間」があるから「古典」なのではなく、人々に読まれ続け、愛され続けたから「古典」なのです。そのことをわかっていただくためには、「創作の文学史」だけではなく、「享受の文学史」という視点をもっと導入しなければならないと思います。²⁾

また、竹村信治氏も、『中学校学習指導要領解説 国語編』（平成 20 年 7 月）にみられる、「伝統的な言語文化は、創造と継承を繰り返しながら形成されてきた」という文言に着目され、

……「伝統」は変化、更新の持続的な展開こそがその本義となる。継承（読みと表現）の間の改変、更新、創造、あるいは“不変”の詐称といった行為と出来事に焦点をあてた「伝統的な言語文化」の教材化、学習指導ができないか。³⁾

と、古典の継承に関わる「教材化、学習指導」の提案をなされている。いずれも首肯されるものであろう。

なお、竹村氏が具体例の一つとして挙げられているのも『伊勢物語』に関する学習であり、以前に拙稿でも『伊勢物語』第六段を例にとって享受に関する学習を提案したことがある⁴⁾。挿絵等を活用した授業を提案・実践され、古典の享受に関する学習の意義を説かれている窪田祐樹氏も、やはり『伊勢物語』初段や第二十三段を例にとられている⁵⁾。また、実際、高等学校の現行教科書には、江戸時代のパロディー作品である『仁勢物語』を紹介し、『伊勢物語』が江戸時代においても広く読まれ、親しまれていたことを説明するコラムを掲載したものなどもみられる⁶⁾。片桐氏が述べられるように、「文学作品はもちろん、絵画をはじめとする美術工芸品や、能や文楽・歌舞伎というような演劇にまで大きな影響を与えて来」た『伊勢物語』は、たしかに「その享受の文学史を構築する出発点になるのに最もふさわしい作品」であるといえよう⁷⁾。

しかし、現行の中学校教科書（平成 27 年（2015）検定）において、『伊勢物語』を主たる教材（学習材）として取り上げているものはみられない。『伊勢物語』の享受・継承に関する学習を中学校でおこなうことは、現状では教授者にとっても学習者にとっても負担の大きいものであると思われる。将来的には『伊勢物語』の中学校教材としての可能性について検討することも必要かもしれないが、ひとまずは、今ある教材を最大限どう活用しうるかといった、即時的、現実的な視点を持つことも重要であろう。そこで、

本稿では、現行の中学校教科書にみられる教材の中から有用と思われる例を挙げ、それらを手がかりとして、教科書を活用した、あるいは契機とした、古典の享受・継承に関する学習の提案を試みたい。

3. 現行中学校教科書にみられる例

古典の享受・継承に関する学習に資すると思われるものの例として、まず、学校図書『中学校国語 2』の教材「源平争乱の歴史語り—平家物語」末尾（pp.187-8）における次のような説明が挙げられる。

……『平家物語』は、現在、何種類かのものが伝わっています。この物語を聞いたり読んだりした人が、語り直し書き直して、新たな『平家物語』をいくつも作り出したのです。何種類かある『平家物語』は、それぞれが異なる何かを語っています。語り伝え書き伝えられる中で、〈平家物語〉から何らかの新しい意味が発見され、それを語ろうとする「言葉の力」が働いて、それぞれの『平家物語』が誕生していったのです。

更新と再生の営み—時代を超えて愛好されてきた古典は、絶え間なくこの営みを繰り返しています。文化の継承は、更新と再生と共にあるのです。

更に、同教科書は、「古典芸能に見られる古典解釈」というコラムを載せ（pp.202-203）、先の『平家物語』教材中の「敦盛の最期」について、「後世に様々な芸能で演じられています」とし、能「敦盛」などを例として紹介している。その上で、

死霊の舞は自らの最期を再現する舞、この世に残した怨念の舞です。怨念は能作者・世阿弥が「敦盛の最期」から読み取ったもの。その解釈が詞章に、また舞の所作に込められています。こうして、伝統文化は読者の解釈に支えられ、新たなメディアで新たに再生するのです。

と締め括っており、そのような点からもうかがえるように、同教科書は、『平家物語』のような古典作品が、後代の人々にも享受され、「更新」や「再生」を伴いながら継承されてきたことへの着目を明確に促しており⁸⁾、注目に値する。

また、学校図書『中学校国語 3』においても、「先人の達成とともに一本歌取りなど」（pp.191-193）というコラムで、「長恨歌」や柿本人麿歌の後代における享受（表現の引用、絵画化など）の例が紹介されており、教科書中には明記されていないものの、指導書において、「言語文化の継承は更新を伴うことを理解する」及び「更新を伴う言語文化の継承の一例として本歌取りを理解する」という「学習目標」が設定されている⁹⁾。

なお、ここに挙げた二つのコラムは、学校図書の以前の

教科書（平成 23 年〈2011〉検定）にはみられなかったものである。同社の教科書は、「更新を伴う言語文化の継承」（学習指導要領の文言を用いるならば、「発展」的「継承」と換言することなどもできようか）に関する学習をより重視していこうとする動きがうかがえるものという点でも興味深い。

後代における享受・継承への着目が促されている例としては、教育出版『伝え合う言葉 中学国語 1』の教材「古典の扉を開く一百年後、千年後の友人であるあなたへ」（pp.104-108）にみられる、次のような説明も挙げられようか。

これは川柳という文芸の一つで、次のようなものもあります。…（中略）…

その後はこはごは翁竹を割り
…（中略）…三句めは、「かぐや姫」のことだと思いたればわかるでしょう。川柳はこのように、ごく日常のできごとを描くこともあれば、文学や歴史の中のことを素材にすることもあります。…（中略）…川柳の作者が取り上げたかぐや姫の物語は、書かれてから千年以上たっています。そんな昔のことが、江戸時代の庶民が作った川柳の中で、まるで身近なできごとのように取り上げられ、そして、現在の私たちが、またそれを楽しんでいるのです。

川柳という江戸時代の文芸における『竹取物語』享受も、前述のような発展的継承の一例といえよう¹⁰⁾。このような具体例を示すことにより、『竹取物語』が確かに古くから親しまれていたらしいことを、作品の内容自体をおさえるだけの場合よりも、学習者は理解しやすくなるのではないだろうか。

『竹取物語』教材の例としては、光村図書『国語 1』の教材「蓬莱の玉の枝―「竹取物語」から」の前にみられる次のような例（p.146）も、古典の享受・継承への着目を促しているものとして注目されよう。

これから学習する「竹取物語」は、「かぐや姫」という題名でもよく知られています。千年以上前に成立したこの物語は、現在に至るまでさまざまな形で描かれ、人々に親しまれ続けてきました。

同教科書では、この文章と同じページ（p.146）に、以下のものを挿絵として掲載している。

○絵巻物

「竹取翁とかぐや姫絵巻物」（作者未詳・江戸時代）

○絵本

「かぐやひめ」（秋野不矩 画・一九六七年）

○切手

「昔ばなしシリーズ第四集 かぐや姫」（森田曠平 画・

一九七四年）

○映画

「かぐや姫の物語」（高畑 勲 監督・二〇一三年）

「現在に至るまでさまざまな形で描かれ、人々に親しまれてきたこと、すなわち後代における享受がうかがえる具体例が示されているのである。特に「絵巻物」の例からは、『竹取物語』が江戸時代から、すなわち、確かに古くから享受されていたこと¹¹⁾、そして、「絵本」「切手」「映画」の例などから、それが現代にまで継承されてきたことが、視覚的にも理解しうるものになっている¹²⁾。これらは前述のような発展的継承の例として取り上げうるものでもあり、特に映画などは、学校図書『中学校国語 2』でも述べられていたような、「読者の解釈に支えられ、新たなメディアで新たに再生」したものの一つとしてわかりやすい例であるともいえよう。

挿絵ばかりでなく、教材とする古典作品の写本や版本の写真を掲載しているケースも少なくない。そのようなものも、古典の享受・継承のあり方を示唆しうるものとして重要であろう。古典が長く読み継がれ、親しまれてきたものであるといっても、その享受や継承のあり方には変遷がみられる。例えば、現在、一般的に用いられるような文字ばかりではなく、くずし字、変体仮名が用いられることもしばしばであった。書写から印刷へ、写本から版本へといった、メディアの変化などもみられる。また、写本などをみると、句読点やカギ括弧といった記号もみられず、それらが後代に付されたものであることなどもうかがえる。そのように、現代の活字で記された本文をみているだけではわからないことが、写本などからは読み取れる。写本などをみることで、実際にその作品が古くから読み継がれてきた、例えば印刷技術・出版文化などの発達していない時代をも経て継承されてきた、ということや、作品の内容ばかりを学ぶ場合よりも、学習者は意識しやすくなるのではないだろうか。

4. 現行中学校教科書の問題点

一部の例を挙げたに過ぎないが、上述の通り、現行の教科書には、古典の享受・継承への着目を明確に促している教材や、享受・継承に関する学習に資すると考えられる資料などが既に少なからずみられる。それらを有効に活用することが求められるところだが、ここであえて教科書の問題点についても指摘しておきたい。

教科書では、古典作品について、古くから親しまれてきたもの、長く読み継がれてきたものであるといった旨のことがしばしば述べられている。だが、そのことを述べるにとどまっているものも少なくなく、前節で取り上げたもののように、実際に例などを挙げながら具体的な享受や継承のあり方にまで言及しているものはあくまで一部に過ぎない、というのが現状である。

それでも、ほとんどの教材において絵巻・写本等の資料が挿絵・写真として掲載されており、それらは享受・継承の歴史の一端をうかがいしるために有用なものと考えられる。それらがいつ描かれたものなのか、いつ書写されたもののかなどを知ることで、作品自体の成立より後の時代においても、その作品が確かに人々に享受されていたらしいことを学習者は実感しうるだろう。但し、これについても一つ問題があり、掲載された絵巻・写本等については、肝心の制作時期・書写年代等が教科書に明記されていないケース、すなわち、いつ頃のものであるのかが不明瞭な形になっている場合も少なくないのである。勿論、明記されている例もあり、教科書には記されていないとも指導書に詳細な解説が載せられているというケースもある。だが、同じ教科書中에서도明記されているものとされていないものがあったり、指導書にも明記されていないケースがあったりと、絵巻・写本等の資料の扱いについては必ずしも統一的ではないのである。

本稿の目的は教科書の問題点をあげつらうことにあるわけではないので、上述のような問題のみられる箇所を逐一挙げることはしない。具体例や制作時期・書写年代等が掲載されていないことについて、やむをえない事情があったり、何らかの意図による処置であったりする可能性も考えられる。また、そもそも、上述のような問題の指摘はほとんど揚げ足取りのようなものに過ぎないところもあり、むしろ、それをカバーすること、あるいはかえって有効に利用することによって、教科書を活用した、あるいは契機とした、古典の享受・継承に関する学習が可能になるものとも思われるのである。

5. 教科書を活用した学習の提案

例えば、ということで、ひとまず、三省堂『現代の国語 1』の『竹取物語』教材によりながら、教科書を活用した、あるいは契機とした学習の可能性を提示しておくことにしたい。

この教科書では、『竹取物語』教材の冒頭 (p.104) に、次のような文言がみられる。

『竹取物語』は、今から約千百年前の平安時代に書かれ、現代にいたるまで長く読み継がれてきた、日本で最も古いといわれている物語です。

この文言により、「それでは実際にどのように読み継がれてきたのか、人々はどのように『竹取物語』に親しんできたのか」という問題を提起することが可能になる。

そこから、教科書に掲載されている絵巻などの資料を用いて、それらが作品の享受・継承の歴史をうかがわせるものであるということを学習者に対して示唆する、という方法が考えられよう。同教科書には、教材の末尾 (p.113) に『竹取物語』の版本の写真が掲載されており、「(江戸時代

に刊行されたもの)」というキャプションによって刊行時期が明示されているため、まずはそこに着目させたいところである¹³⁾。ちなみに、この版本については、指導書に早稲田大学図書館所蔵のものであることが記されているが、現在、早稲田大学の「古典籍総合データベース」により、インターネット上でもその写真をみるのが可能になっている¹⁴⁾。同じ本の別の箇所の写真や、別の伝本なども公開されているので、このようなデータベースの有効活用もありうると思われる。

また、同教科書には、挿絵として『竹取物語』の絵も掲載されている (pp.106-109, p.112)。制作時期は教科書に明記されていないが、版本について「(江戸時代に刊行されたもの)」と記されていることなども踏まえつつ、「それでは、これらの絵はいつ頃に描かれたものなのだろうか」といった発問を契機に、教授者による紹介や、学習者自身による調べ学習などにつなげていくこともありえよう。ちなみに、こちらの挿絵についても、指導書に国立国会図書館所蔵のものであることが記されており、「国立国会図書館デジタルコレクション」により、やはり、インターネット上でも見るのが可能になっている¹⁵⁾。その解題などをみると、制作時期は必ずしも明瞭ではないようであるが、どうやらこれも近世の成立とみられ、そのことは、同じ絵を掲載している光村図書『国語 1』の指導書でも次のように説明されている。

国立国会図書館蔵の「竹取物語絵巻」による。なお、現在確認されている「竹取物語絵巻」は十数本あり、そのいずれもが近世の成立で、公家や武家の女性たちのために作られたもののようである。

なお、教育出版『伝え合う言葉 中学国語 1』の指導書では、同教科書に掲載されている國學院大學図書館所蔵の絵巻だけでなく、「他の絵巻を見せて、『竹取物語』の世界にさらに親しませたり、この物語の享受の歴史の厚みを感じさせたりする」といったことも促されている¹⁶⁾。そのように、教科書に掲載されている挿絵・写真への着目を契機に、享受・継承に関する学習の範囲をさらに広げていくことなどもありえよう。その中で、江戸時代の文芸である川柳における享受など、第3節でみた例のように、その時代の文化とも結びついた発展的な享受・継承のありようをもおさえることによって、そこから更に、現代の文化とも結びついた発展的な享受・継承のありようなどにも目を向けさせていくことが可能になるのではないと思われる。『竹取物語』については、光村図書『国語 1』に掲載されていたような絵本や切手、映画などの例も勿論だが、他にも例えば、作家による現代語訳や、英訳、切り絵、漫画の例¹⁷⁾などを挙げることができよう。

このように、『竹取物語』のような古典作品が、その成立期ばかりではなく、江戸時代など、後の時代をも経て発展的に享受・継承されてきたことをおさえつつ、映画や漫

画、現代語訳などをみれば、現代においても引き続きそれがなされていることが理解されてくるように思われる。そのような学習を通して、古くからなされてきた古典の発展的な享受・継承、それが現代においてもなされており、自分たちもそれに関わっている、関わりうるのだという実感を持つことが、現行の学習指導要領などのいう、「伝統的な言語文化に親しみ、継承・発展させる態度」の育成のためには必要なのではないだろうか。例えばライトや朗読劇など、以前からなされている学習活動についても、そのような発展的な享受・継承の一端として位置づけていくことで、いっそう意義のあるものとなりうるのではないかと思われる。

6. おわりに

以上、具体的な指導案の提示などには至っていないものの、古典の享受・継承への着目を明確に促す教材を含む教科書が既にみられ、それを活用しうること、また、そうでない教科書を用いた場合でも、教科書中の文言や挿絵・写真等への着目を契機として、古典の発展的な享受・継承に関する学習が可能であることなどを述べてきた。

古典が後代の人々によって発展的に享受・継承されてきたものであったと理解することは、例えば、その作品の持つどのような要素が人々を発展的な享受へとかりたてたのか、どのような要素を持つがゆえに発展的に継承されえたのか、という問題を考える契機ともなりえよう。それは、作品自体を理解する必要性、すなわち、作品を読んでその内容を理解することの意義を意識することにもつながっていくものであると思われる。そのように、享受・継承への着目は、その作品の持つ魅力や価値について考える契機ともなりうるのである¹⁸⁾。

なお、享受・継承への着目は、古典の持つイデオロギー的な要素に踏み込むことにもつながりうるものであり、そのような点から、教材として扱うことの危険性を懸念する立場などもありえよう。しかし、あえて極端な言い方をすれば、そのような要素が絡んでいるかもしれないことを隠蔽したまま、現代にまで伝わり残っているから読む価値があるのだなどと押しつけ、作品を読むことにばかり時間を割くような学習よりは、享受・継承への着目とともに、そのような要素もありうることについて意識させていく方が、むしろ健全なのではないかとも思われるのである。勿論、慎重に考えなくてはならない問題ではあるが、古典の享受・継承に関する学習が広がっていけば、そのような問題に関する議論もまた、より活性化していくのではないだろうか¹⁹⁾。

古典の享受・継承に関する学習をおこなうべきであるということは過去にも繰り返して述べてきたが²⁰⁾、新しい学習指導要領の実施をひかえた今、その可能性や必要性をあらためて強調しておきたい。

付記

本稿は、全国大学国語教育学会第 133 回福山大会（2017 年 11 月、於福山市立大学）での口頭発表に基づくものです。席上等でご教示を賜りました諸先生方に厚く御礼申し上げます。

なお、本研究は、JSPS 科研費 JP16K21167（「古典の享受・継承に関する学習についての研究」）の助成を受けたものです。

注

- 1) 『中学校学習指導要領解説 国語編』（平成 29 年 6 月）に次のような文言がみえる。
中央教育審議会答申においては、「引き続き、我が国の言語文化に親しみ、愛情を持って享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成するため、伝統文化に関する学習を重視することが必要である。」とされている。
これを踏まえ、「伝統的な言語文化」、「言葉の由来や変化」、「書写」、「読書」に関する指導事項を「我が国の言語文化に関する事項」として整理し、その内容の改善を図った。
- 2) 片桐洋一、(2000),『伊勢と源氏 物語本文の受容』（『伊勢物語』の本文と『伊勢物語』の享受）、臨川書店、p.63。
- 3) 竹村信治、(2012),「“伝統的な言語文化”の掘り直し（上）—『伊勢物語』初段、『今昔物語集』「馬盗人」などを例に一」、国語教育研究, 53, 広島大学国語教育会, p.55。全国大学国語教育学会第 121 回高知大会（2011 年 10 月）のパネルディスカッションにおける発表内容の「詳報」としてまとめられたもの。
- 4) 有馬義貴、(2014),『源氏物語続編の人間関係 付 物語文学教材試論』（「古典の享受・受容から学ぶ文化と伝統」の第二章「『伊勢物語』第六段の享受・受容を例として」）、新典社。全国大学国語教育学会第 119 回鳴門大会（2010 年 10 月）における口頭発表をもとにまとめたもの。
- 5) 窪田祐樹、(2016),「挿絵を活用した『伊勢物語』初段の読解指導」、横浜国大国語研究, 34, 横浜国立大学国語・日本語教育学会。窪田祐樹、(2016),「物語絵から読む『伊勢物語』—教材としての可能性—」、教育デザイン研究, 7, 横浜国立大学大学院教育学研究科。なお、前者では前掲の片桐氏の言葉も引用されている（p.29）。
- 6) 桐原書店『探求国語総合 古典編』（国総 330）p.53 及び同社『国語総合』（国総 331）p.263 に掲載されているコラム「『伊勢物語』のパロディー」。
- 7) 注 2) p.63。「絵画をはじめとする美術工芸品や、能や

- 文楽・歌舞伎というような演劇」への『伊勢物語』の影響については、〈片桐洋一・後藤明生, (1990), 『新潮古典文学アルバム 5 伊勢物語・土佐日記』, 新潮社) などが参考になろう。
- 8) 注 3) の竹村氏が同教科書の「編集委員」を務められていることと無関係ではないだろう。
- 9) 東京書籍『新編 新しい国語 3』にみえる教材「恋の歌」(pp.288-290) も、本歌取りを取り上げて古歌の発展的な享受・継承について示唆しているものであり、意義のあるものと思われる。なお、同教材の著者で、同教科書の「著作関係者」に名を連ねられている鈴木健一氏には、〈鈴木健一, (2001), 『伊勢物語の江戸—古典イメージの受容と創造』, 森話社〉、〈鈴木健一, (2006), 『知ってる古文の知らない魅力』, 講談社現代新書 1841) 等、古典の享受・継承に関する著作がある。
- 10) これに類する例として、三省堂『現代の国語 3』巻末の「資料編」に掲載されている川柳や狂歌 (pp.242-243. 『古今和歌集』の仮名序を踏まえた狂歌「歌よみは下手こそよけれあめつちの動き出してたまものかは」など) の例も注目に値しよう。なお、三省堂の各教科書巻末の「参考資料」の一つ、「日本文学名作集」中にも川柳「そののちはこわごわ翁竹を割り」が掲載されている。
- 11) 『竹取物語』の絵巻に関しては、例えば教育出版『伝え合う言葉 中学国語 1』の指導書においても、教科書に掲載されている絵巻について、「本絵巻は、元禄期に描かれたものである。…(中略)…庶民の中での文化享受が広がっていたことを表す」といった説明がなされている。
- 12) ここに挙げた文章及び挿絵は、光村図書の以前の教科書(平成 23 年(2011) 検定)にはみられなかったものである。
- 13) 同教科書では、「江戸時代に刊行されたもの」であることが明記された版本の写真のそばに、『竹取物語』の成立した時代(平安)と現代(平成)との間に、鎌倉、室町、安土桃山、江戸、明治、大正、昭和という時代のあったことが視覚的にわかりやすい形で示されている。これも古典の享受・継承に関する学習において有用なものであると思われる。
- 14) 「古典籍総合データベース」(早稲田大学)
<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>
 当該版本は「たけとり物語」(文庫 30 C0004) で、
http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko30/bunko30_c0004/index.html
 から写真などをみることができる(2017 年 11 月 30 日閲覧)。
- 15) 「国立国会図書館デジタルコレクション」
<http://dl.ndl.go.jp/>
 当該絵は「竹取物語」(本別 12-3) 中のもので、
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1287221?tocOpen&d=1>
 から写真などをみることができる(2017 年 11 月 30 日閲覧)。
- 16) ちなみに、現行教科書を対象とするものではないが、中学校教科書における『竹取物語』の挿絵について詳細に論じられているものとして、〈中島和歌子, (2007), 「中学校国語教科書『竹取物語』の挿絵をめぐる問題点と可能性—『竹取物語絵巻』昇天図の解釈と分類—」, 札幌国語研究, 12, 北海道教育大学国語国文学会・札幌) がある。
- 17) 現代語訳として、〈川端康成, (1998), 『現代語訳 竹取物語』, 新潮文庫〉、〈星新一訳, (1987), 『竹取物語』, 角川文庫〉、〈森見登見彦・川上弘美・中島京子・堀江敏幸・江國香織訳, (2016), 『池澤夏樹=個人編集 日本文学全集 03 竹取物語 伊勢物語 堤中納言物語 土佐日記 更級日記』, 河出書房新社)、『竹取物語』は森見登見彦氏) 等々、英訳や切り絵の載るものとして、〈川端康成[現代語訳]・ドナルド・キーン[英訳]・宮田雅之[切り絵], (1998), 『対訳 竹取物語 The Tale of the Bamboo Cutter』, 講談社インターナショナル) 、漫画の例として〈池田理代子, (2014), 『マンガ古典文学 竹取物語』, 小学館〉、映画の例として、前掲の〈高畑勲監督, (2013), 『かぐや姫の物語』, スタジオジブリ) と、〈市川崑監督, (1987), 『竹取物語』, 東宝) が挙げられる。
- 18) 一方で、〈福田孝, (2013), 「古典教材としての『竹取物語』」, 全国大学国語教育学会発表要旨集, 全国大学国語教育学会) では、本稿で中心的に取り上げた『竹取物語』について、『竹取物語』が今日までに辿ってきた享受史とその占めてきた位置とをよく理解したうえで、絵本で知っているからと言って入門期の古典教材として恰好の作品といえるのかどうか、考えなくてはならないように思う」(p.372) というように、「古典教材としての価値」(p.369) に対する疑問も投げかけられている。「古典教材としての価値」の問題に関する検討はひとまず措くが、古典の享受・継承に関する学習が広がっていけば、そのような議論もより活性化していくのではないと思われる。
- 19) 『竹取物語』の古典教材としての価値の問題などとともに、イデオロギーの問題についても言及したものとして、〈有働裕, (2010), 『これからの古典ブングクのために 古典教材を考える』, ペリかん社) が参考になろう。
- 20) 注 4) 拙稿「古典の享受・受容から学ぶ文化と伝統」、及び〈有馬義貴, (2015), 「古典を読み継ぐ」, ならやま, 49 (2015 年夏号), 国立大学法人奈良教育大学) 。なお、前者の第一章『源氏物語』の享受・受容を例としてでは、イデオロギーの問題などについても触れている。